

プロローグ
Prologue 響きあう声

昔は「トーフイ」と呼び歩いた、あの呼び声がいっただいところから聞かれなくなったかどう
も思い出せない。すべての「ほろび行くもの」と同じように、いつなくなつたともわからないよ
うにいつのまにかなくなり忘れられ、そうして、なくなり忘れられたことを思い出す人さえも少
なくなりなくなつて行くのであらう。(…)

こういうふうには、旋律的な物売りの呼び声が次第になくなり、その呼び声の呼び起こす旧日本
の夢幻的な情調もだんだんに消えうせて行くのは日本全国共通の現象らしい。

寺田寅彦「物売りの声」^{〔1〕}

物理学者の寺田寅彦は、一九三五（昭和一〇）年五月に発表した随筆で豆腐売りなどの物売りの声
がまちから消えゆくことを述べている（寺田〔1935〕1999）。寺田が随筆で取り上げたのは豆腐売りのほ
か、納豆売り、玄米パン売り、苗売り、辻占売り、あんま、朝顔売り、鯉売り、竿竹屋、千金丹売り、
枇杷葉湯売り、定斎屋、生菓子売り、七味唐辛子売り、牡蠣売り、丸葉柳・山オコゼ売り。この頃の
東京は旋律的な物売りの呼び声がまちなかで響いていたようだ。たしかに寺田がいうように、その
どれもが減びていった。「旧日本の夢幻的な情調」は、物売りの声とともにすっかり消えうせたと
言つてもよい。ただし、「物売り」は減び、響きあう声が消えたのかというとは言い切れない。

この研究は、「滅びゆくもの」とされてきた店とまちを、商世界（バザールワールド）から、あるいは〈もの〉というミクロな世界から捉えようとするプロジェクトである。京都市北部「出町」と呼ばれるまちにおける、〈もの〉の交換を通じて発生する社会関係と、自律的・共同体的な関係性に着目し、それらが行われる「店」と店を取り巻く商世界の様相を描いていく。対象となる店は、徒歩で行き来することのできる半径二キロメートル以内の狭い範囲内にある。

本書は、複数の場所で生じた現象と経験を対象として分析するマルチサイテッド・エスノグラフィでもあり、〈私〉の個人的経験と自己省察からなるオート・エスノグラフィでもある。私はかつて、建築家バーナード・ルドフスキーによる「建築家なしの建築 Architecture without Architects」に影響を受けた「音楽家なしの音楽 Music without Musicians」「コレクティブ・オーケストラ」と呼ぶいくつかのワークショップや公演を東南アジア各地と日本各地で企画していた⁽²⁾。思い返すと本書の原型は、音楽の経験を通じて、そして二〇一一年の東日本大震災以降、宮城県松島市⁽³⁾、福島県福島市・いわき市・浪江町⁽⁴⁾、北海道札幌市・白老町・伊達市⁽⁵⁾、東南アジア諸国におけるアートプロジェクト⁽⁶⁾を通じての経験のなかであたためられ、東京、沖縄県宮古島市、福岡市、京都市、群馬県前橋市に暮らすなかで、形づくられていった。

二〇一九年から開始したフィールドワークは二度中断を余儀なくされた。一度目は、二〇二〇年からの新型コロナウイルス感染症である。コロナ禍において移動が制限され、当時行っていた沖縄のフィールドワークを断念することになった。京都の出町では、乾物屋、豆腐屋、古書店といった独立自営店舗は営業を継続していたが、大売り出しや大根焚^{だいこん}といったイベントはすべて中止され、フィー

ルドワークは縮小せざるを得なくなった。しかし、非常事態の只中で研究するという経験は、当初のもくろみとは異なる方向に目をみひらかせていった。休業すると生計手段を失うため、小さな店は個人の判断で営業・運営し続けていた。それは国の要請や規制によって、大規模店舗や公共施設、大学や公共ホール、美術館が閉鎖された状況とは対照的だった。大学院生だった私にとって、大学や図書館の閉鎖は研究の中断を意味し、公共ホールや美術館の閉鎖によって文化芸術活動は中止に追い込まれた。そんな中で、しぶとく商売を維持していた店は、行き場を失った人の行き先になった。私も店に居場所を探し求めたひとりだった。店はものの売り買いを通じた社会インフラを維持することで、社会生活の底が抜けるのを防ぐ場所として機能していた。この時期を経ることで、私にとって店は、研究対象として真剣に向きあう存在になった。人びとは、出かけるついでではなく、人や社会とのつながりを求めて店を訪れていた。オフィシャルな社会機能の停止や縮小は、小さな店の社会機能と役割を浮上させたのである。

二度目の中断は、コロナ禍が落ち着いた二〇二三年、群馬県前橋市の公立美術館での仕事によるものだった。公立美術館は、行政の文化戦略や政策に位置づけられており、市役所職員や学芸員がそのしくみを担う。近年の美術館は、地域住民らとのコミュニケーションを目的とした企画やイベントが求められるようになっていく。そのなかで、公立美術館のような公的機関に求められる活動と、私的領域、たとえば個人の店や個人の企画のような活動は、空間的にも機能的にも明確に隔てられるものではなくなっている。たとえば私が暮らしたまちに最も多くの人が集うのは、七夕飾りを市民がコンペティションで競う「七夕まつり」だった。通りにおけるイベントが、専門家が企画するイベントよりも多くの人を集め、まちに賑わいをもたらす現象は、沖縄のまちでも京都のまちでも同じように見

られた。イベントを通して店は、普段のまちでは起こらない出会いを生み出す場になる。店のような私的空間、あるいは美術館のような公的空間において、イベントや集まる場をつくることにどのような違いがあるのだろうか。ものを介して集まる、話す、人に見せる、あるいは売る、使うといったことは、目的、あるいは意味あいにおいても、その境界はきわめて曖昧になっているように感じられた。

二〇二四年に私は京都に戻ることにになり、これまでの経験がひとつの研究テーマとして像を結んでいた。個人が営む店を媒体として人とまちとの関係がつくられている。しかし、店の文化的・社会的側面や、店によってまちが生成される再帰的な側面にはほとんど光があてられていない。これまでの研究で店は、地域、家族制度の再生産、あるいは流通システムといった機能的側面が主に論じられてきた。また店は、グローバル資本主義経済の末端において、絶滅寸前の非生産的な労働の場であるとも指摘されてきた。だが、社会的・文化的営みの中で店は、地域に必要とされる職人的といえる芸や生産活動を生みだしていることについては、それほど着目されていない。また小規模店舗は、家族経営で職住一体型の前近代的な形態であることが問題視され、いずれ滅びると指摘されてきた。ところが近年では、日本を含む先進国において真剣に追求する職業として、若者らがふたたび小規模自営業・小売業を目指すようになってきている。だが店がどのように・いかにして私的なつまり場でかつ社会的なインフラストラクチャにもなりうるのか、といった疑問に対しては、ほとんど明らかにされていないのである。

最大の謎は、先行研究において衰退する、滅びる、前近代的といった危機が叫ばれてきた「小さな店」は滅びておらず、「時代遅れの仕事」ではなく「やりがいのある仕事」という積極的理由による職の選択肢のひとつにもなっていることだ。近年ではDIY（セルフビルド）の方法やそのための材料

が容易に手にいれられるため、自分（たち）で店をつくる傾向にある。DIYは物質的なものだけでなく、店の中でのライブや展覧会にも見られる。インターネット上ではセルフビルドの方法を丁寧に説明した動画で溢れている。ソーシャルネットワークを活用することにより、クラウドファンディングで初期費用を集めるなど、技術面と資金面のハードルは下がっているという環境の変化も、店の開業を後押ししている。こうした環境を活用して、費用をかけずに独自の店を開拓する傾向も見られる。それは本書で明らかにされるように、新しく店をはじめめる若者に限らず、「老舗」も同様である。収入や社会保障が不確定であるという要因を加味してもなお、職業としての店は積極的な選択肢であり続けている。つまり、店は仕事を提供し、生計手段や目的としてあり続けているにもかかわらず、店が担う生産・消費を生み出す地域経済活動、地域文化を担い・創出する場、人が集まる社会空間として機能しているという点は見逃されてきたのではないだろうか。

このような視座に基づいて本書は、日々店で生みだされている〈もの〉を、ミクロな実践から明らかにする。さらに店がおかれている場所における相互作用——店が扱う〈もの〉と人とのインタラクシオン、つまり〈もの〉に向きあい、改良や改善を加えること——と、そうしたスキルが店に与える相互補完的な関係性にも着目する。分析するのは、店におけるインフォーマルな協調のネットワークや実践といった微視的な活動である。これまで小規模自営業・小売業は、流通や経済という視点から、非効率性や非生産性といったモノフォニック（単声的）な視点で切り取られることもあった。だがそうした「店」は、通りやまちを使いこなしながら、「社会」の変化に自らを適合させ、時に抵抗しながら生き延びている。本書では、店やものを介して生みだされる〈アート〉に注目することで、多種多様な生の営みがまちへ滲みでることと人の円環を生みだし、固有の「ミセノマ」を生成するといっ

た様相を描きだしていく。

本研究が注目するような小さな店の実態は、参入と退出が容易でミクロな単位で営まれるため統計的な把握が難しく、これまで明らかにされてこなかった。本書を通じて、流動する社会の中で身体を持ち生きる私たち人間と、人間が生きるための店と環境との相互作用は、日々の生活においていかに生成され、どのように立ちあらわれるのか、といったことを描いてゆきたい。それは、出町というまちの生彩に満ちた「ミセノマ」の全体像を浮き彫りにするのみでなく、現代社会で生きる人びとの、複雑でポリフォニック（多声的）な状況に、新たな光をあてることになると信じるものである。